

近代語研究 近代に口語訳された三種の梅暦

北崎 勇帆

一 はじめに

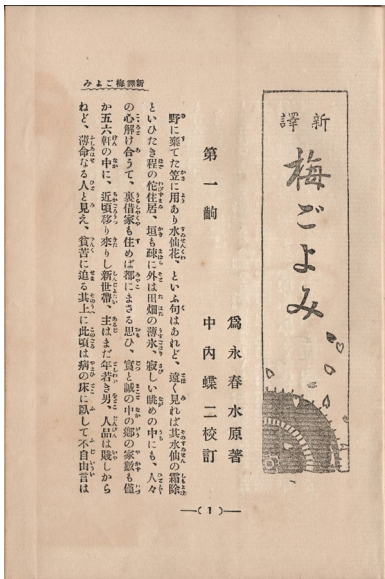
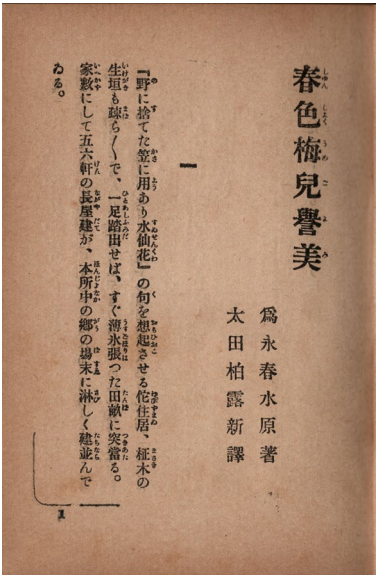
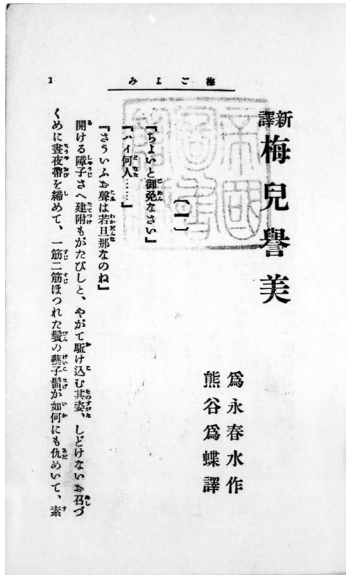
近代における近代以前の国文学作品の理解にあたっては、近世以前から続く注釈か、もしくは、近世に新たに成立した俗語訳という方法が採られた。与謝野晶子訳『新訳源氏ものがたり』(一九一二・二、金尾文淵堂)は明治期における後者の代表であり、この「新訳」の刊行は当初、太田水穂訳『新訳伊勢物語』(一九一三・四、博文堂)、鴻巣盛広訳『口訳落窪物語』(一九一三・二一、博文館)のような中古文学が対象となったが、新訳の刊行が広がるにつれて、次第にその対象作品の時代の幅も広がっていく。

北崎(二〇二〇)では、大正期に新訳された佐久間春山『新訳狂言記』(一九一九・一二、日本書院)と、その種本となった江戸時代の版本「狂言記」の翻刻本との比較検討が近代語研究に資する旨を述べた。これら新訳の類は、「ある語・形式や表現が当代においてどのように使用されたか」という情報のみならず、近代に生きる訳者が前代に書かれた作品のどの語を新たに置き換えたか、すなわち、どのような語を積極的に「古い」ものと見做したかが看取できるといふ点において、他の近代語資料にない優位性を持つ。ただし、その新訳がどれだけ、またどのように「新しい」のかという問題や、全ての新訳作品を同質に「新しい」ものとして扱って良いのかという点については詳細に検討することができなかった。こうした前提のもと、本稿では、三種の異なる新訳が刊行されている為永春水著『春色梅児誉美』(以下、「梅暦」)を取り上げ、この資料性について検討することとしたい。

後述の熊谷為蝶訳の序文に「『梅暦』と云ふ書名は、人の能く知つて居る世間に能く通つた名である」ともあるように、梅暦は近代にもよく読まれたようで、新訳にも以下の三作品が存する。

A 熊谷為蝶訳『新訳梅ごよみ』(一九一三・三、東雲堂書店)

B 太田柏露訳『梅ごよみ』(一九一八・六、豊文館)



(右上) A本
(左上) B本
(右下) C本

C 中内蝶二訳『新訳梅ごよみ』(一九二〇・九、名作人情文庫刊行会)

以下、各本の書誌と序文に示される新訳の目的・方針を紹介し(二節)、それぞれの冒頭部を示してその特徴を概観した上で(三節)、これらの新訳の組から読み取れることを、特に意志・推量形式を対象として述べる(四節)。

二 三種の新訳「梅ごよみ」

二・一 熊谷為蝶訳(A本)

近代の新訳三種の中で最も早い作品が、熊谷為蝶訳『新訳梅ごよみ』(以下、A本)である。縦一七・八×横一一・八センチ、大正二年二月二五日印刷、同年三月一二日発行。発行者、西村寅次郎(東京市京橋区)、印刷者、遠藤銓吉(東京市京橋区)。

凡例には以下のように、新訳の「新傾向」に伴って『梅暦』を訳すことにしたという経緯が述べられており、

『梅暦』を現代語に書き直して見やうといふ、こころもち宿志は、少くとも四五年前からの考りであつた、∴(中略)
∴暫くおくらとして居つた所が、近似大分新訳何々といふ新傾向に伴ふて、聊か其萌しを催して来た、所へ先ごろ羽織芸者に関することを少しく調べたのが動機で、其物奇の気分が著しく湧起して来たので、取り敢えず十二卷丈をものしたのである。

その新訳の意図を次のように述べる。

『梅暦』と云ふ書名は、人の能く知つて居る世間に能く通つた名であるし、丹次郎と云ふ名も亦能く人が知つて居る。

さりながら群衆おほくの中には、それ等の内容コンテンツを全く知らずに居る人も無いではない、又未だ一度も見たことも読んだこともないと云ふのは、如何には物足りない、話であるから、一面に於ては江戸軟文学の一部分を未知の人に紹介する方便として、他方に於ては従来多くの人の喜んで話の材料に用ゐたものを、成程この位の程度に取扱つたら―手前味噌の様で恐縮であるが―差支へはない、と御賛成を得、最う一つは其著者為永春水の

仕事の局部を、後世に語り伝へる為にもなるだらうと思ふ。

「拙訳不十分ながらも取扱つたのであるから、肝腎かんじんかなめ要素の部分ところは其筋の御注意に由り、可惜あつたフキルムをキビムと切り捨てゝ了つた」とある通り、場面を丸ごと省略する場合も多く、次節以降に見るように、三種の新訳の中では最も刊行が早いのが、原作からの改変は最も甚だしい。

熊谷には他に『名家演芸ひかへ帳』(編、一九二〇・一一、東雲堂)、『芸者の手紙』(編、一九二二・一一、彩文館)、『艶色かゞみ』(一九一三・四、大屋書房)といった編著があり、凡例にある「羽織芸者に関することを少しく調べた」のはこの前二者を指すのであろう。このうち『芸者の手紙』の編者序文には「桑田春風、田村西男、小泉迂外、の諸先生より与へられたる多大の援助に対して、深く諸先生の厚意を感謝する」とある。俳人小泉迂外(一八八四—一九五〇)は、明治四四年(一九一一)に『俳諧江戸調』(中島辰文館・武田文永堂)を「熊谷無漏」なる人物と共に著しており、その刊記には「熊谷発之助」とある。この熊谷発之助は同じく明治四四年に竹本撰津大掾述『義太夫の心得』(中島辰文館・武田文永堂)を刊行しているのだが、その「心得」の末尾(二一八頁)には「為蝶編」とあるから、熊谷為蝶⇨熊谷無漏⇨熊谷発之助ということにならう。また、『艶色句選』(一九一五、五井書院)にも小泉の序文があり、そこには「著者無漏子は先きに『艶色かゞみ』を著し、今又これを輯纂す。その花柳に精しきこと、野暮天揃の俳壇に於て、まれに見るの通客なり。」とあって、これも「無漏」が前述の『艶色かゞみ』の著者の「熊谷為蝶」であることを示す。

『俳諧江戸調』の小泉の序文によれば、熊谷は「今の俳壇を通じての江戸通」であり、「しかも純江戸の血を享けてゐる東京人である」といい、『俳諧江戸調』などの「無漏」による序文にはしばしば「樽正町の仮宅」が登場する(樽正町は現在の中央区日本橋)。

二・二 太田柏露訳(B本)

扉題「梅こよみ」、内題「春色梅児誉美」。縦一五・二×横一〇・八センチ、大正七年六月一日印刷、同年六月一日発行。発行者、池清一(東京市小石川区)、印刷者、金山佐次(東京市神田区)。訳者の太田柏露には『新訳本朝桜陰比事』(秋山湖風との共訳、一九二七・一、須原啓興社)、西鶴『武家義理物語』を原拠とする『新訳浮世の情』(秋山湖風との共訳、一九一七・四、豊文館)、『五人女』(一九一八・七、豊文館)、『二代男』(一九一八・一〇、豊文館)の新訳がある。本書の広告には『浮世の情』が載り、その『浮世の情』には、小川笹舟訳『変装浮世風呂』(一九二〇)の広告がある。この『変装浮世風呂』もその名の通り、『浮世風呂』の翻案・訳書である。

なお、太田にはこれらの新訳と並行して、同じ豊文館から当時の恋文を集めた『男女思ひのふみ』(一九一八・七)があるほか、幕末の合巻『浮寝鳥籠連』(二八五〇—一八五四)を改題校訂した『浮寝鳥恋の連』(一九一九・一一、辰巳文庫)や、先の秋山湖風との共編による『隠語辞典』(一九二八、文僊堂)、『最新現代用語辞典 大正拾四年版』(一九二五、明光社)などがあり、多作である。

「国文を新訳するのは、丁度鰻を他人に噛んで貰ふやうなものだと或友人が言つた。面白い譬喩である。」から始まる序文は、「余程の閑日月を持つた人でないと、一々原文を味ふ趣味と智識を養つてゐる暇はあるまい」とし、併せて原文公刊が難しいことを述べた上で、

西鶴を解するもの、春水を解する人が見たら、或は鰻を噛んで貰ふ物足りなさがあるかも知れないが、西鶴はどんな作、春水はどんな作とまだ読んだ事のない人の為には、此口語訳が充分其作風を偲はせるだらうの自信を持つてゐる。私は此所信で西鶴や春水の比較を読者の前に呈供したのである。

と新訳の目的を説く。訳の方針については「努めて逐字訳の形式を執つて、現代の人達に判らぬ習慣用語の他は、成べく当時の風俗言語を其儘に用ひた」こと、「(注・地名を仮称として) 仮称の下に地名の実称を入れたり、あて字を

訂正したりした」ことなどが述べられる。⁶⁾

二・三 中内蝶二訳（C本）

大正九年九月八日印刷、同年九月二〇日発行。縦一八・九×横一三・一センチ、発行者、松本貞雄（東京市赤坂区）、印刷者、高嶺繁太郎（東京市小石川区）。発兌「名作人情文庫刊行会」は所在地を東京市芝区今入町一二に置く。同一の番地に、発行者の松本貞雄に關係すると思しい松本書院が所在し、原昌通『波瀾重疊幕末明治大正史』（一九二二）などの歴史書を発行している。

訳者の中内蝶二（二八七五—一九三七）は高知県出身の小説家・劇作家。「名作人情文庫」には中内訳のものに『新訳東海道中膝栗毛』（一九二〇・七）、『新訳偽紫田舎源氏』（一九二〇・一二）があるほか、田村西男訳『新訳西鶴五人女』（一九二〇・六）、田村西男校訂・松本春浪訳『新訳いろは文庫』（一九二〇・八）、田村西男訳『新訳賣色安本丹』（一九二〇・一二）、田村西男訳『新訳浮世床古今百馬鹿』（一九二〇）もある。なお、中内と田村は共編で『日本音曲全集』を「日本音曲全集刊行会」より刊行している。

序文には、「江戸時代に於ける人情本の白眉と称せられるものは梅ごよみである」と作品選択の理由を述べるが、訳の方針は明確には示されない。ただし、訳者は異なるものの、同シリーズの『新訳西鶴五人女』序文には「此書は其新訳を試みたものであるが、由来此書は其妙文を以て徳川時代に於ける軟文学の精粹と称するに足るものであるから、之を新訳するに方つても、全然現代語に代へることをせず、成るべく原文の妙を保存し、其難解を認むる点のみを改むるに止めたのである。」とあり、中内訳の『新訳東海道中膝栗毛』の序文には「篇中の方言俚語に至つては、作者の最も意を用いた所であり、且当時の風を知るの便となるを以て原本の儘に保存することとした。」とある。本書も同様の方針のようで、三種の新訳の中で最も改変が少ない。

三 四本の対照

少々長くなるが、冒頭部を対象として原作と新訳を対照して示す。⁶⁾

☆（末尾の表）

例えばA本は、⑩「知れめへか」↓「知れないか」、⑮「くことでもねへが」↓「くなこともないが」、⑯「聞てへこと」↓「聞きたいこと」など、江戸語のいわゆる連母音訛を忌避して二重母音へと戻す傾向にあり、B本も同様、⑩「知れめへか」↓「知れまいか」、⑮「くことでもねへが」↓「くでもないが」、⑯「聞てへこと」↓「訊きたい事」とする点で同様の方向性を持つが、⑧「米八ぢやねへか」、⑮「ふさいでならねへ」のように、ナイ系においてはそれを保持する箇所もある。C本はA・B本で見られた箇所も含め、⑨「夢ぢやアねへか」、⑩「知れめえか」、⑮「くことでもねえが」と原作そのままであり、A本・B本が言文一致体に訳す地の文も、文語体らしさを残す。その他、A本は呼びかけの「少し」を①「すこし御免なさいまし」↓「ちよいと御免なさい」とし、現在以前を指す⑮「十五六日跡」を「二週間ばかり前」とするなど、積極的に書き換えを行う。後発のC本の改変はむしろ少なく、B本はA本とC本の中間に位置すると言える。同じ「新訳」の名を冠する作品であっても、その訳の傾向にはグラデーションが存するようであり、その度合いの差は必ずしも新訳が行われた時期とは一致しないようである。このことを踏まえ、次節では意志・推量の諸形式をケーススタディとして、改変のほぼ見られないC本を除き、A本・B本に絞って新訳の問題と資料性について検討する。

四 新訳作品における意志・推量形式

四・一 ウとダロウ

かつて意志と推量の両方の機能を担った助動詞ムは、現代語に至る過程で意志専用の形式となり、推量を近世後期に成立したダロウと分担するようになる。この分担・交替は一律に進行したわけではなく、近世後期においてはアル・ナル以外の動詞はダロウに、アル・ナル・形容詞（形容詞型の活用語含む）・タはウに偏ることが指摘されており（中村一九四八、原口一九七三、鶴橋二〇一三）、新訳二種はその傾向をよく示す。次例(1a)は、原作のタロウをA本・B本ともにタデシヨウに置き換え、(1b)はA本のみがタロウを書き換える例である。

- (1) a. 蝶 「姉さん気色は何ともないかへ帰りがいつもよりおそかつたろうネ
↓ 『姉さん只今、帰りが何時もより遅かつたでせう』 (三編巻八・一二ウ)
↓ 『姉さん只今、帰りが平素より遅かつたでせう』 (A本・一三三)
↓ 『姐さん只今、帰りが平素より遅かつたでせう』 (B本・一六八)
- b. 曲 「モウ「風呂が」明きましたらう
↓ 『もういゝでせう、悪くすると腫眼縁の芸者が、…』 (三編巻八・二〇)
↓ 『もう沸きましたらう、だが女湯はまだ沸きますまいから、…』 (B本・一五〇)

同様に形容詞十ウも、一律にダロウに置き換えられるわけではないが、何らかの形で改変が行われる傾向にある。

- (2) a. 曲 「…何かの容子はおまへが直にたづねて来たがよからうといはれて… (二編巻五・七ウ)
↓ 『…又詳しい事はお前が直に聞いて来た方が可いわ。』 (A本・九一)
↓ 『…翌日になつたら早速丹さんの処を訪ねて見るがいゝよ、分別はそれからさ。』 (B本・一〇四)
- b. 丹 「サアまたあんまりおそくなつたらわるからふ
↓ 『サア遅くなると不可ないよ』 (初編巻三・一八才)
↓ 『さあ余んまり遅くなるといけまいから、もう帰るとしようよ。』 (A本・六一)
↓ 『さあ余んまり遅くなるといけまいから、もう帰るとしようよ。』 (B本・六八)
- c. かげ八 「…おいらんがなんぼ朝おそくつてもおひもじかるう (四編巻一二・一二ウ)
↓ 『…花魁は何程朝が遅くつても、お腹が空きなさつたでせう』 (A本・二一一)
↓ 『…花魁がいくら朝遅くつても、嘸お腹が空いたらうに…』 (B本・二五八)

原作と新訳とを一对一で対照可能な例に限定し、原作における動詞十ウ、形容詞十ウ、タロウ、マイのそれぞれを、A本・B本がどのように改変するか（もしくははしないか）を集計し、次表一に示す。例がそれほど多くないため明確な差は出ないが、前節に見た傾向に沿い、A本がB本よりも多くダロウに置き換えていると言えるだろうか。

四・二 ダロウとノダロウ

近世後期のダロウは一般的な推量と原因推量の両方を表し得た（土屋一九九三）が、文政期以後に新たに成立したノダロウがその領域に進出することで、次第に一般的な推量のみ機能が縮小していく（青木二〇一七）。原作の梅暦はちょうどその過渡期にあり、春水は理由に対する疑問に「なぜくだろう」と「なぜくのだろう」を併用する（鶴橋一九九八）。次例(3a)では、A本は原作における原因推量のダロウをノダロウにする一方でB本はウのまま保持し、(3b)はA本・B本ともにノダロウ類に改変する。

表1 ダロウへの改変

	A本			B本		
	対応箇所あり 改変あり	なし	なし	対応箇所あり 改変あり	なし	なし
タロウ	タデシヨウ (3)、タノダロウ (3)、タカシレナイ類 (2)、デシヨウ (1)、タノデシヨウ (1)	3	3	タデシヨウ (3)、タノダロウ (2)、タカシレナイ類 (2)	6	3
形容詞ウ	ヨイ (2)、ヨイデシヨウ (2)	3	0	ヨイ (1)、ヨイダロウ (1)	2	3
	タデシヨウ (1)、ゴザイマシヨウ (1)、イケナイ (1)	3	4	デシヨウ (1)、タロウ (1)、マイ (1)	3	4
マイ	ナイ (8)、ナイデシヨウ (2)、マセン (1)、ナカロウ (1)、ナイダロウ (1)、アルモノカ (1)	26	6	ナイ (4)、マセン (2)、ナイダロウ (2)、ナイデシヨウ (1)	22	14

(3)

- a. よね「ほんにのふ堪忍しねへ面目ないがなぜこんなに迷つたらう
 ↓『堪忍してね、すまないがどうして此様に迷つたらう』
 ↓『堪忍しておくれ、ねエ梅次さん、何故私きアこんなに迷つたらう。』
 ↓『お前は何故こんなに果敢ない身の上になつたんでせうねえ』
 ↓『お前様、飛んだ不合せと云ひながら、どうして斯んな身の上になつたのだらう?』
 ↓『おいらんエなぜマア私はこのやうに苦勞症でありますだらうねへ』
 ↓『花魁、どうして私はこんなに苦勞性なんでせうねえ、』
 ↓『花魁、何故私は斯う苦勞性に生れ付いたのでせうね、』
- (二編卷四・七才) (A・七二)
 (初編卷一・二七ウ) (B・七九)
 (A・一二)
 (B・一八)
 (四編卷一二・一七ウ) (A・二一九)
 (B・二六四)

四・三 ヨウダとソウダ

現代語における終止形接続のソウダは「天気予報によれば明日は雨が降るそうだ」の如く、外部から得た情報に基づき伝聞を表すが、近世においては推定の機能も持ち合わせる(岡部二〇〇二)。(4a)は外から入ってくる煙を感知してそれを根拠としつつ、その出処として鰻を沢山「焼くそうだ」と推定し、(4b)はやつれた花魁を見て、その原因を「苦勞をさしたそうで」と推定する。現代語ではそれぞれ、「焼いているようだ」「苦勞をなきたようだ」とありたい例であるが、新訳ではA本・B本ともにソウダを用いていない。

(4)

- a. 丹「…そりやアいゝがたいそふ烟る。出前でも沢山焼そふだ。どふも素焼の匂ひがきらひだ。
 ↓『…それはそうと馬鹿に烟むるね、どうも素焼の匂ひは恐れるよ』
 ↓『…ほい話に夢中になつて烟の上つてくるのも知らなかつた。オレはどう云ふ訳か鰻が好きでゐながら、』
- (初編卷三・一六ウ) (A・六〇)

どうも此素焼の匂ひが大嫌ひさ、

(B・六六)

b. 蝶「ヲヤ／＼おいらんかへどうしてマアここへヲヤいつそ苦勞をさしつたそうでおやせなはいましたは

(四編卷一二・一七ウ)

↓『あらッ、花魁、どうしてマア此所こゝちに……いつそ苦勞をなすつたと見えて、おやつれなすつたのねえ』

(A・二一九)

↓『おやつ、花魁かへどうしてまあ……和女おまはんも苦勞したと見えて大層お瘦せなさいましたね。』

(B・二六三)

ソウダが現代語と異なる一方で、江戸語のヨウダも現代語とは異なり、「自分がそういう気がするという意味」(湯澤一九五四・四九八)、「話し手の内的感覚」(岡部二〇〇二・二〇一一)を表すことができる。例えば次例の「目が回るようだ」は、現代語のヨウダの感覚には合わず、連用形接続のソウダで「目が回りそうだ」と述べたいところである。

(5) ア、なんまいだ／＼。目がまはるよふだ。

(東海道中膝栗毛・岡部二〇一一・一九九頁)

前節に示した冒頭部の⑫「咽のどがひつつくよふだトいひながらそばへすはり」もこの類であり、A本はこれを「咽のどがひつつきさうなのよ」とし、B本はこの箇所を削除する。原作中には同様の例が他に五例存し、特にA本はこの「内的感覚」のヨウダを全て忌避しているように見える。

(6) a. 丹「なんだか心ほそくなつてどふも版うらしもねへようだが。どふしても帰らざあなるめへのウ

(初編卷一・一七オ)

↓『何だか心細くなつて、どうも帰かへしたくないが』

(A・一八)

↓『何んだか心細くなつて、どうも帰かへしたくねへが、と云つて帰らざあなるめへし……』

(B・二五)

b. 丹「なにかまだ用があるやうだツけ。イヤい／＼急で行なヨ

(初編卷一・一九オ)

↓『何か云ひ残した事があるやうな気がしてならねへ、いや何んにもなかつた、では急いで行きなよ。』

(B・二八、A本対応なし)

c. 丹「ナニ宅か家はもふ宅といふ名ばかりで。はなすも外聞ぐわいぶんがわりいよふだ

(初編卷三・一三ウ)

↓『宅うちかい……宅うちはほんの名ばかりで、所詮お話にならないよ』

(A・五六)

↓『家かへ、家と云つても名計りで、話すも外聞ぐわいぶんが悪いやうだ。』

(B・六二)

d. 長「イ、エ泣はしませんヨ 丹「それでもどふもおかしいよふだ。サア白をふきな

(初編卷三・一八オ)

↓『泣いてやしないわ』『だつておかしいぢやないか』

(A・六一)

↓『いゝえ、泣きはしませんよ。』『何か感違あやまひでもしてゐると見える、見つともない、顔を拭きな。』

(B・六八)

e. 長「……それだけれど今夜のやうな。そふ／＼しいお座敷では。義太夫はどふもじれつたいやうでありますヨト。

(三編卷七・八オ)

↓『……今夜のやうな、騒々しいお座敷では、義太夫はだめよ』

(A・一一八、B本対応なし)

四・四 意志のウと従属節

現代語において、南(一九九三)がC類従属節としたガ・カラ・ケレド・シは、いずれもウ・マイ・ダロウを包含することができるが、このウ・マイは推量の場合に限られ、話者の意志を示す場合には生起し得ない。一方江戸語においては次例(8)のように、意志のウを包含する例が見られる(北崎二〇一九)。

(7) a. *明日は頑張ろうが、明後日は頑張りすぎないようにしよう。

b. *明日は頑張ろうから、今日はもう休もう。

(8) a. ^細ほんにあの時わつちもいつそ酔いたよ ^三そんならちつとつぎんしようから出しなんし

(甲駅新話・北崎二〇一九・一四頁)

b. 今日の働き、半日払ひにせうけれど、なまなか半手間取らうより、頼みの祝に皆進上にさつしやれど、お内儀様の言渡しと、

(薩摩歌・北崎二〇一九・一四頁)

(9) に示すように、大正・昭和に入っても意志のウ+従属節の例は容易に拾えるため、いつ頃現代と同様の制約が生じたのかという問題は、単に近代語の用例を縦に並べるだけでは解決しにくい。新訳では基本形などに置き換えることでこのウを避ける意識が明確に認められ、話者によってはこの時期に既に違和感のある表現であったということを窺い知ることができる。

(9) a. 大神は、「それでは、明日お供をして海ばたへ来るがよい。名を取りかえてくださったお礼を上げようから」とおっしゃいました。

(鈴木三重吉「二八八二生」古事記物語「一九二〇」)

b. さ、ひとつついでに、背中を流してあげようから、その手拭をこっちへお出し

(邦枝完二「二八九二生」おせん「一九三四」)

c. 私に少しも関係のない者ならそりゃ観てもやろうけれど、何分にも私に関係して居る事で、もしその易がここに留つてよいという事が出ると… (河口慧海「二八六六生」チベット旅行記「一九〇四初出」)

d. 「マア途方もない！ せめて十両ぐらゐなら私も買つてみようけれど……」

(宮原晃一郎「二八八二」竜宮の犬「一九三三」)

(10) a. 丹「マア今にくわしく咄そうがおめへは兎も角も梅次さんにはやく酒でも

(二編巻四・二ウ)

↓『追々と委しく話すが、梅ちゃんに早く一杯……』

(A・六五)

↓『まあ俺から詳しく話すが、兎も角梅次さんに早く酒でも……』

(B・七三)

b. ^長「ずいぶんお客を大切に勤めて浄璃理を精出しませうがどふぞ旦那をとるの左文太さまのお世話になるのといふ事は堪忍しておくんなさいヨ

(二編巻六・一四ウ)

↓『お座敷は大切に勤めて、語り物を精出しても、どうぞ旦那取るの、古鳥様のお世話になるのといふ事は、堪忍して下さいまし』

(A・一〇九)

↓『随分お客を大事に稽古に精出しますから、どうぞ旦那取りをする事や、左門太様のお世話になる事は、堪忍しておくんなさいよ。』

(B・一三一)

c. 文「藤さんかナニ今日はもう奇もなさるめへもしお出なすつたらいいやうにいふからマア帰んなせ

(二編巻四・一七ウ)

↓『藤さんなら、今日はもうお出はなからう、もしお寄りなすつたら、何とか何して置くから、一先づお開きとした方が可い』

(A・八三、B本対応なし)

d. 由「…その内藤さんがお出ならおまへのお咄しをいたそうがおまへのお宅はどちらでございますか

(四編巻一〇・四オ)

↓『…その内藤さんがお見えでしたら、お前さんの咄をしますからお宅はどこなんです』(A・一五九)

↓『…其中藤さんがお出でなら、貴方の親切をよく話して置きます、あのお宅は何処ですへ。』

(B・二〇四)

四・五 推量とデハナイカ

デハナイカは中世末期に成立した、否定疑問の複合形式の一つであり、江戸語では特に「既定事実の確認」に使用が偏る(矢島二〇一六)。江戸語ではデハナイカ類に推量形式が前接することがある(湯沢一九五四)が、これを現代語にそのまま「だろうじゃないか」と直訳すると違和感が残る。

- (11) a. 私しや近頃此お内へ来たものを、知らない筈だらうじやアないか
(いろは文庫・湯澤一九五四・二八五頁)
(花筐・湯澤一九五四・二八五頁)
- b. 何もそんなに怖い訳はあるめへじやアねへか

「さあ、行こうではないか」のような勧誘する場合であればデハナイカへのウの接続が容認されることも踏まえると、ダロウの意味が近代以降に確認要求に偏っていく(土岐二〇一〇・白岩二〇一五)ために、確認要求を表すデハナイカに前接すると意味が余剰になってしまうということが関係するものと考えられる。これも前項同様、昭和期に至っても例を拾うことができるが、新訳では既にA本・B本ともに推量のウ・マイとデハナイカ類の重複を避けているように見える。

- (12) a. 文「…今の浮世で藤さんのやうに実意の有人はめつたにはあるめへじやアねへか。といつて手めへの田へ水を引やうな異見をいふ気はさら／＼ねへどふかおめへの身の立やう又藤さんの気の済やうな法のつけやうが有ふじやアねへか
(二編巻四・一六ウ)
- ↓『…当節柄藤さんのやうな実意のある人は先づ滅多にあるものぢやないよ、…又藤さんの気の済むやうな段取りがあらうといふものぢやないか』
(A・八二)
- ↓『…此頃の客種で、藤兵衛さんのやうに実意のある人は沢山あるめへ、…どうかして藤兵衛さんの顔も立ち、和女の義理も立つやうな上手い工夫がありさうなものだ。』
(B・九一)
- b. 小「コウおばさんくはしいわけは知らねへがこの子は子どものことだから姉御とやらに掛合て連て行なすつたらよかろうじやアねへか
(三編巻八・六オ)
- ↓『…この娘に云ふより、姉とやらに掛合つて連れて行きなすつたらどうだらう』
(A・一二三)
- ↓『…一応姐さんに断つて連れて行つたらよからうと思ふが…』
(B・一五六)

五 おわりに

「新訳」を題に冠する作品であっても、その「新訳」の度合いには、訳者ごと、訳本ごとの訳の意図に基づく差異があり、それは必ずしも新訳が行われた時期の早さとは一致しない。梅暦の三種の新訳はそのことをよく示しており、その度合いの差もまた擬似的に、史的変遷の過程を反映するものとして利用することができる。本稿での引例の全てが原作に対する新旧の意識を反映したものであるとは限らない(例えば、単に訳者の気まぐれであった可能性も否定できない)が、「新訳」という資料群が、量的な観点から示しにくい言語形式の衰退の過程を質的に明らかにする手段として有効であること、また、現代語とそれ以前の対照によって新たな問題意識が浮かび上がると同様に、二時代間の比較を通して新たな示唆を与えてくれる資料群であることは間違いないだろう。

注

- (1) 国会図書館蔵本には付箋による修正がある。
- (2) 小泉は『俳諧江戸調』序文で熊谷を「無漏兄」と呼称し、一方の熊谷は凡例で小泉を「小泉辻外君」とするほか、俳人岡野知十(一八六〇生)を「先生」、堀野文祿(一八七〇生)を「君」と呼ぶ。また、桑田春風(一八七七生)

は『現代社会八面観』（一九二〇、山口屋書店）序文で熊谷を「無漏君」と呼び、熊谷は『芸者の手紙』序文で桑田や田村西男（一八七九生）、小泉を「諸先生」とする。『新訳梅こよみ』凡例では饗庭篁村（一八五五生）を「先生」、版元の養子で歌人の西村陽吉（一八九二生）を「君」、『天明俳句集』（一九〇三、内外出版協会）では、巖谷小波（一八七〇生）・内藤鳴雪（一八四七生）・野口寧斎（一八六七生）・饗庭篁村・佐々醒雪（一八七二生）・笹川臨風（一八七〇生）を「諸先輩」と呼ぶ。熊谷の生年を直接知る術はないため、以上の記述に基づいて、呼称が必ずしも年齢をそのまま反映するわけではないことは念頭に置きつつ、一八七〇年代以降の生まれであると考えておく。

(3) 本書は吉丸（二〇一九）にその一部が紹介されている。

(4) 『浮世の情』凡例にも「努めて原文の妙味を失はないやうに、なるべく逐字訳の形式を執つた」とある。

(5) 国立国語研究所公開テキストデータ (<https://dgb01.ninjal.ac.jp/ninjal/bunken.php?title=umegoyomi>) による。「狂言記」の場合には収録曲の曲名によって原拠本となった翻刻本を推定し得た（北崎二〇二〇）が、梅暦においては原作がある程度自由に改変していることもあって、その推定が難しい。版本に拠らなかったということも十分に考えられるが、本稿では原拠本の問題については措くこととする。

(6) 用例検索・出典は国立国語研究所（編）全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ（20200401）による。

参考文献

青木博史（二〇二七）「のなら」の成立―条件節における準体助詞―有田節子（編）『日本語条件文の諸相―地理的変異と歴史の変遷―』くろしお出版

岡部嘉幸（二〇〇二）「江戸語におけるソウダとヨウダー推定表現の場合を中心に―『国語と国文学』79・10

―――（二〇二一）「江戸語の推定表現」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版

北崎勇帆（二〇一九）「意志・推量形式の終止・非終止用法の推移」『高知大国文』50

―――（二〇二〇）「近代に口語訳された狂言記」『国語語彙史の研究』39

白岩広行（二〇二五）「推量形式の用法の通時変化について―江戸・東京の文芸資料をもとに―」『上越教育大学国語研究』29

土屋信一（一九九三）「のだらう」以前―江戸語の「だらう」の用法―『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂

鶴橋俊宏（一九九八）「為永春水の人情本におけるダロウ・ノダロウ」『日本文化研究』10

―――（二〇一三）『近世語推量表現の研究』清文堂出版

土岐留美江（二〇一〇）『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房

中村通夫（一九四八）『東京語の性格』川田書房

原口裕（一九七三）「江戸語の推量形」『静岡女子大学研究紀要』6

矢島正浩（二〇二六）「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」大木一夫・多門靖容（編）『日本語史叙

述の方法』ひつじ書房

湯澤幸吉郎（一九五四）『江戸言葉の研究』明治書院

吉丸雄哉（二〇一九）「明治以降の「浮世風呂」」『国語と国文学』96・7

付記 本稿は、科学研究費補助金（19K23043・20K13049）による成果の一部である。

	原作	A本	B本	C本
①	女『すこし御免なさいましノ あるじ』アイどなたエ	『ちよいと御免なさい』 『ハイ何人……』	『御免下さいまし、御免下さいまし』と媚めかしい女の声ノ。 『誰方へ?』	女『すこし御免なさいましノ 主』アイどなたえ。』と言ふ声の下、
②	女『そふいふお聲は若旦那さ ん	『さういふお聲は若旦那の か若旦那?』 ね』	『お、さう云ふお聲は、慥女 か若旦那?』	女『さう言ふお聲は若旦那。』
③	といひつゝあける障子さへ、 ゆがむ敷居にやうくと、	と、歪む敷居に障子の建付も がたくと、	と、言ひつゝ明ける障子さへ、 歪める敷居にガタくと、	といひつゝあける障子さへ、 ゆがむ敷居にやうくと、
④	あけて欠込其姿、上田太織のや がて駈け込む其姿、しどけ 鼠の棒縞、黒の小柳に紫の、 ないお召づくめに昼夜帯を縮 やままゆじまの縮緬を鯨帯とめて、	もどかしさうに押開けて、駆 込むやうに這入つて来たのは見 ぬ姿、上田太織の鼠の棒縞、黒 の山繭縞、縮緬の鯨帯	は、一目にそれと知られる仇 縞、黒の小柳に紫の山繭縞の 姿、上田太織の鼠の棒縞も配 縮緬の鯨帯	あけて欠込其姿、上田太織のや がて駈け込む其姿、しどけ 鼠の棒縞、黒の小柳に紫の、 ないお召づくめに昼夜帯を縮 やままゆじまの縮緬を鯨帯とめて、
⑤	下着はお納戸の中形縮めん、一 筋二筋ほつれた鬢の藝子鬢 おこそ頭巾を手に持て、みだ が如何にも仇めいて、 れし鬢の嶋田鬢、	下着はお納戸の中形縮緬、お 高祖頭巾を手に持った乱れ鬢 の島田鬢、	下着はお納戸の中型縮緬、お 鬢の島田鬢、	下着はお納戸の中形縮めん、一 筋二筋ほつれた鬢の藝子鬢 おこそ頭巾を手に持て、みだ が如何にも仇めいて、 れし鬢の嶋田鬢、
⑥	素顔自慢か寝起の儘か、つく ろはねども美しき、花の笑顔に 縞はないが美しく、それで に愁の目元、亭主はびつくり 顔うちながめ	素顔自慢か寝起の儘か、知 ぬが、化粧せぬ顔が却つて浮 出たやうな美しさを見せてゐ る。	素顔自慢か寝起の儘か、つ ろはねども美しき	素顔自慢か寝起の儘か、つく ろはねども美しき、花の笑顔に 縞はないが美しく、それで に愁の目元、亭主はびつくり 顔うちながめ
⑦	主『米八じやアねへか。どふ して来た。そして隠れて居るの 此所が知れるといふもふしぎ なこと。	『お、米八ぢやねへか、ど うして来た、何処で俺の隠家 を聞いて来た?』	此処が知れるといふも不思議 なこと。	主『米八じやアねへか。どふ して来た。そして隠れて居るの 此所が知れるといふもふしぎ なこと。
⑧	マアくこちらへ夢じやアね此 方へ這入つたら好いでせ へか トおきかへりてすはるう』	まあく、此方へ上りねへ、 真逆夢ぢやなからうな。』と 上つて珍らしさうに繁々と女 の顔を見詰める。	マアく、此方へ、夢ぢやアね めえかと思つて胸がどきどき して、	マアくこちらへ夢じやアね此 方へ這入つたら好いでせ へか トおきかへりてすはるう』
⑨	よね『わちきやア最、知れぬ へかと思つて胸がどきどきし て、	『私きアもう知れまいかと思 つて、心配で心配で、	米八は、米『私やアもう知れ ぬえかと思つて胸がどきどき して、	よね『わちきやア最、知れぬ へかと思つて胸がどきどきし て、
⑩	おまはんは煩つてみさつしや るのかへ トかほをつくつく 見て	『おまはん煩つてみさつしや るのかへ。』と眼元潤ませて男 の顔を覗きながら、	米『おまはん煩つて居さつし るのかへ。』と、つくつく 顔を見て、	おまはんは煩つてみさつしや るのかへ トかほをつくつく 見て
⑪	寔にやせたねへ。マア色のわ りいことは。眞青だヨ。何時 分からわるいのだへ	『瘦たねへ、まあ顔色の悪い 事、蒼白だよ、	米『まことに瘦せたねえ。マ ア色の悪いことは、眞青だよ。 何日時分からわるいのだえ。』	寔にやせたねへ。マア色のわ りいことは。眞青だヨ。何時 分からわるいのだへ
⑫	主『ナニ二十五六日跡からヨ。 大造なことでもねへが、どふ も氣が閉でならねへ。』	『さうよな、十五六日後から よ、大した病氣でもないが、 どうも氣がふさいでならね へ、	主『ナニ二十五六日後からよ。 大層なことでもねえが、どう も氣が鬱いでならねえ。』	主『ナニ二十五六日跡からヨ。 大造なことでもねへが、どふ も氣が閉でならねへ。』
⑬	それはいゝが手めへまア、ど ふして知つて来たのだ。聞 へこともたんとある	そりやさうとどうして此処を 聞いて来たのだ?よく知れた な、逢ひたかつたぞ。種々と 訊きたい事が沢山ある。』	それはいゝが手前マア何うし て知つて来たのだ。聞きてえ へこともたんとある。』	それはいゝが手めへまア、ど ふして知つて来たのだ。聞 へこともたんとある
⑭	トすこしなみだぐみてあはれ 也	と思ひ懸けない逢瀬の嬉しさと 少し涙ぐむ。	トすこしなみだぐみてあはれ 也	トすこしなみだぐみてあはれ 也